

## 景観が語る名古屋

表題と写真は、名古屋都市センターが1999年3月に刊行した写真集である。大学の講義や講演などで活用してきた。

「記憶のある都市風景」から一長い年月を経た建築や景観には、故郷を懐かしく思う気持ちにも似た不思議な感慨がある。そこには都市で暮らす人々の記憶がやどり、過去と現在とを有機的に結びつける働きがある。すり減ったファサードの大理石に、黒ずんだ柱の温かな手触りに、私たちは人の営みを発見する。新しい景観と古い景観が隣接し共存する様子に歴史と断絶することなく変貌した都市の足跡をみる。魅力ある都市景観には感情に語りかける「物語」がある。都市の風景はそこに住み着いた人々の価値観と文化の反映なのだから。

広小路本町の第一景から、名古屋駅の第十四景まで、過去と現在の写真が綴られる。賑わいの情景として大須、江戸の遺香として有松と四間道が取り上げられる。そして「都市名古屋の一世紀」で、近代都市への胎動、戦災復興から現在、新世紀への階段が語られる。さいごの10行をよく読み上げたものだ。

古い建造物を手掛かりに定点観測を試みたこの写真集の制作過程で気付いたことは、新しさと引き換えに私たちは限界への愛着や記憶の拠り所を失おうとしている現実だった。成熟した都市には、時間や記憶が可視化されたモニュメントがもっと欲しいというのが率直な印象である。守る景観と作る景観とのバランスとコントラストが、都市をいっそう魅力的に輝かせるにちがいない。

都市の風景は人間が築いた「環境」であり、「社会」である。その環境は人々の人生を豊かに、幸福にするものでなければならない。人間が生きるための都市=社会をめざし、その理想像に向けて名古屋は新たな一步を踏み出した。

この写真集の刊行から10数年。名古屋は新たな一步を踏み出したのか。「都市再生」の名のもとに、開発ラッシュが続く名古屋。超高層ビルの建設のかげで、大切な都市の景観とアメニティが次々と失われているのではないか。



(2016年10月9日)